ジャーナリスト・カフェ in 名古屋 詳報

報道の役割や在り方を考える「ジャーナリスト・カフェ in 名古屋」（中日新聞社、南山大、カナリア舎共催）が14日、南山大（名古屋市昭和区）で開かれた。テレビ朝日「報道ステーション」の大越健介キャスターが南山大の山岸敬和・国際教養学部教授、奥田太郎・社会倫理研究所教授、加藤美喜・中日新聞編集委員とともに、米大統領選などを題材に、参加者約400人と語り合った。

参加した学生らと意見交換する大越健介キャスター（左）ら登壇者たち＝名古屋市昭和区の南山大で

現場でこそ分かること 大切

記者は人の話を聞き、それが真実か裏を取りながら世の中に発信する仕事です。先日、尹錫悦（ユンソクヨル）大統領が「戒厳令」を出した韓国に行きました。現場で感じること、その肌触りを大事にしたいからです。

国会前のデモを取材していかに若い人が多いか、と感じました。軍事政権下の韓国を知る人たちが怒りの表情でデモをしている、というイメージだったのですが、全然違った。学生たちがペンライトを持ちコンサートのような形でたくさん集まってくる。現場に行かなければ分からないことがたくさんあるのです。

中には大学の課題をやりながら集会に参加している人もいる。マイクを向けると「大統領は民主主義の破壊者だから、参加しないわけにはいかない」としっかりした言葉が返ってくる。

日本ではどうでしょうか。自分たちの意思表示で政治を変えようという習慣がなかなか身に付いていないのではないか。

見当外れだと言う人もいるかもしれない。例えば（衆院選で）若い人たちがSNS（交流サイト）で国民民主党を拡散し、共鳴した人たちが投票に行き、議席を4倍増やした。若い人たちもテーマによってはしっかり呼応し、SNSで政治参加ができる、というのも一つの意見です。

一方、韓国の学生らは、SNSだ、オールドメディアだ、などとは全然気にしない。自分が得られる情報ツールから正しいと思う情報を選択している。彼らは「メディアリテラシー」を持っていた印象です。

僕らはオールドメディアかもしれないけど、事実を見極め、多様な意見を伝えます。水や空気のようですが、体に必要な情報を届けてきた自負があります。従来のメディアもSNSも良い点、欠点がある。敵対関係にあるのではなく、溶け合っていくものです。

米大統領選の取材にも行き、中西部のミシガン大でユダヤ系の学生に話を聞きました。（イスラエルによるパレスチナ自治区ガザへの侵攻で）校内でも危ない目に遭うため、自警団をつくっていた。真面目にユダヤ教の教義を勉強し、世の中と違う視点を持っていると思っていたが、女子学生を巡り冗談を言い合うごくごく普通の学生たちでした。

なぜ僕が現場に行きたいか、そういうことを知るためです。SNS全盛の時代にマスコミはいらないのか。僕は大きな社会インフラとして非常に重要だと思っていますが、みなさんと語り尽くしたいと思います。

大越さん基調講演

おおこし・けんすけ 新潟県生まれ。85年にNHKに入局し、政治部やワシントン支局長、「ニュースウオッチ9」などのキャスターなどを務め、21年6月に同局退職。同10月から「報道ステーション」キャスター。

参加者との討論

―米大統領選では、民主党候補のハリス副大統領が共和党候補のトランプ前大統領よりも有利で、投票結果も僅差になるかのように日本では報じられました。印象操作ですか。

大越氏 確かに選挙人の数ではトランプさんが312人、ハリスさんが226人で、トランプさんが圧勝と言えるかもしれないけど、得票率で言えば49％対48％。僅差で間違っていない。偏った報道をしているわけではなく、（有利不利は）信頼すべき世論調査を紹介していたのであり、間違っていないです。

山岸氏 一般投票の得票率では、歴史上まれに見る接戦で、獲得選挙人数とは分けて考える必要があります。

奥田氏 伝えようとしていることとは全く別で受け止められ、受け手が分かりやすく受け止める傾向もある。（情報を）提供する側が、米国の選挙制度が難しいときちんと伝え、それを受け止められるように視聴者を育てていくことも必要だと思います。

―前回は郵便投票の結果を調べるのに時間がかかったようだが、今回は。

加藤氏 接戦だから前回並みに時間がかかる、と報じたメディアもあったため「思ったより早く決まったから圧勝じゃないか」というイメージを持った人もいたと思います。今回各州の選挙管理委員会が早く開票結果を出すよう努力していたことをもう少し考慮できたかもしれません。

―大越さんは大統領選の取材でSNSなどを通じて拡散されたデマを信じてしまう人がいて、米国の分断を招いているのでは、と報じていました。トランプ氏を擁護する人たちはそれを偏向報道だと主張します。

大越氏 「ハイチ移民がペットを食べている」という移民排斥の発言を「政治家だから多少の誇張はある。ただ私はこういう（別の）理由でトランプを支持する」という共和党員もいる。今は一時的にSNSの影響力にみんなびっくりしているが、僕はそれほど怖がっていない。あまり恐れず半分は疑ってかかる。受け手のリテラシーの問題だと思います。

加藤氏 ハイチ移民にとってはひどい言われようで、日本の政治家だったら一発でアウトになる発言です。ただトランプ氏支持者は、自分たちの暮らしの方が重要だ、という感覚なのではないのでしょうか。

山岸氏 トランプ氏は事実ではないことを分かっていながら「うそであっても何回も言い続ければ人々は信じる」と言う。大統領候補になるような人がそれで良いのか。民主主義を危ない方向に向かわせていると心配しています。

―政治批判が過熱し、悪口になっているケースがSNSで見受けられます。

奥田氏 自由には、誰にも縛られないという意味もあれば、何かをするための基盤や前提という意味もあります。この自由は育て守り続けていかないと成立しない。悪口やヘイトスピーチが表現の自由と言われる時は、制約なくしゃべるという意味の自由でしかなく、育てていく自由ではありません。どのように育てていく自由に引き込むかが大事だと思います。

―米国に比べて日本で特に若者の投票率が低い現状をどう考えますか。

奥田氏 政治に対する距離感が違うのでしょう。米国の人たちにとって政治はもっと身近なもので、ジャスティス（正義）という概念があり、みんなで正しく生きていくためのものですが、政治や正義というものが日本人の感覚からは遠いからだと思います。

山岸氏 留学生の不満に、日本人に政治の話を聞いても誰も答えてくれないということがあります。留学生と日本人を集めて政治について話す場を設けたら、みんな話しました。日本人は表現の仕方をまだ学んでいないだけではないかと思います。

大越氏 僕らの世代は政治や正義について語ることがちょっと恥ずかしい。でも、言わないから投票率が低いというのは違う気がします。正義や政治について語り合うことをためらわないように自らを鍛えていくことが大事で、10代や20代のうちから臆せずに語る習慣をつけていくしかありません。「誰かが言ってくれないから僕たちは動けない」と言うのでは多分世の中は変わらない。僕も恥ずかしがらずに言うので、皆さんもぜひどうですか。

―既存メディアに対して何となく不信感や疑いを持っていて、何を信じれば良いのか分かりません。SNSの暴走が始まっており、規制は必要だと思います。

大越氏 何の情報を信じたら良いか分からないとのご指摘はまさにそうで僕らもあがいている。誰もが発信者になる時代。疑いの目を向けられるような風潮に対して、だからここに来て皆さんと話をしています。明確な答えを持ち合わせているわけではないが、何とか社会の役に立ちたいと思っています。誠意を持って取材し真実に迫り、異なる意見も伝えていきます。

今回の大統領選では、自分なりに精いっぱいやったし、番組としても持てる力を総動員してわれわれが至った真実を伝えました。それを評価してもらうしかない。皆さんが主体的に情報を選び取っていくしかないし、選んでもらえるよう謙虚にやるしかありません。

加藤氏 マスコミに対して「隠しているでしょう」という批判があります。本当のことを言っていないのではないかと。私たちは確実なものでないと報じたくないが、今の時代はうわさレベルで真偽がはっきりしないものまで出てしまう。SNSで広まっていることを真実だと思う人が「なぜマスコミは報じないのか」と不信感を持つことにつながっていると感じています。

確かなものを出したいというところは新聞各社譲れません。情報をみなさんが拡散する時点でそれぞれ発信者になりますが、責任をどれだけ持てるか、ということもあると思います。昔新聞は「社会の木鐸（ぼくたく）」と言われましたが、私にはそのような意識はありません。一報道機関として正確な報道を続ける中で、信頼してほしい、という思いです。

米大統領選 得票率は僅差 伝え方が課題

やまぎし・たかかず 福井県生まれ。政治学博士（米ジョンズ・ホプキンス大）。専門は米国政治。南山大副学長（グローバル化推進担当）を兼任。著書に「アメリカ医療制度の政治史」（名古屋大学出版会）など。

SNS 悪口と「表現の自由」区別必要

おくだ・たろう 東京都生まれ、奈良県育ち。京都大で哲学・倫理学を学ぶ。博士（文学）。南山大副学長（研究推進・教育支援担当）を兼任。共編著に「失われたドーナツの穴を求めて」（さいはて社）など。

若者と政治 恥ずかしがらず 語り合おう

かとう・みき 茨城県生まれ。95年に中日新聞社に入社し、主に社会部で事件取材などを担当。ニューヨーク、ロンドン両特派員を経て編集委員。未解決事件の連載「風化とたたかう」を担当。

既存メディア批判 正確な報道続け 信頼を築く

取材・山口哲人、斉藤和音　写真・木口慎子